



月のひかりが、草原にふりそぐ夜であった。風はおだやかに草をゆらし、かすかに花のかおりがした。野ウサギが走り去ると、コノハズクがブッポーソーブッポーソーと啼いた。

月のひかりの下に、組んだ足の上にはおづえをついてすわる童の姿がある。ひとの子どもではない。額に角のあとのある、鬼の子であった。しかも、石の。額の角は、根元からぶつりと折れている。

けれど、コノハズクにはわかっていた。石ではあっても、その鬼の子には、魂が宿っていると。それで月の美しい夜には、必ずこの場所へ飛んできた。

鬼の子のところへ来るのは、コノハズクだけではなかった。草原に住む小さなけものたちも、鳥たちも、鬼の子のところへやってきた。

川の流れること、雲のかたちのこと、山桜が咲いた話や柿の実がなったこと。山並みのようすや里で見てきたこと、峠を歩き交うひとたちの話など、けものや鳥たちは、じっとすわっているだけの鬼の子に話して聞かせた。

しかしまだ、石の鬼の子の魂は、ぼんやりとした眠りの中にいた。

幾十年、幾百年か前のこと。時は戦乱の世で、長い長いいくさの日々が続いていった。